

学 位 論 文 要 旨

氏 名 黒田 麻衣子

題 目 前意識知覚の意識化に着目した映像メディア教育の研究  
- 絵本モンタージュ理論を中心に -

1. 研究の目的

本研究では、映像メディアが見る人に対して無自覚・無意識に与える影響を、前意識閾の「無自覚の知覚」に焦点を絞って、絵本のモンタージュ効果を題材に論ずることとする。

絵本は、教育現場で頻繁に用いられている学習材であること、国語科教育の立場からも、絵本は子どもたちが最初に手にする文学的文章であること、学校教育の、とりわけ教科教育実践学研究の題材として、最適であると考えた。

絵本の「絵のコード（絵の読みとり）」に関する研究には、芸術論に立脚した研究は多くある。本論文では、芸術論ではなく、国語科教育の立場からの研究を中心に考察する。

2. 研究の概要

第1章では、映像の意識・無意識の知覚について整理した。現代社会は情報過多であり、五感から得られる情報刺激のすべてを意識的に捉えることはできない。人間の知覚は無意識的に制御されており、多くの情報は無自覚のまま無意識に蓄積されている。意識されない情報が私たちの意思決定や行動に影響を与えることは少なくない。この章では、「見る」ことにおける無自覚な知覚について説明し、意識、前意識、無意識の定義について論じた。

第2章では、国語科教育における「さし絵」の扱いと西郷竹彦の絵本論について考察した。西郷は、絵本の読み聞かせは、「指導者と子どもたちがひとつの芸術世界のなかで、共に呼吸し、生活し、体験すること」であると述べ、「絵をよむこと」の重要性を指摘し、実践に基づいて「絵をよむ」指導方法を提案している。西郷は、絵本を絵と文の複合体で語られる文学として扱い、文学を「よむ力」を育成するための初年次の文学教材としての有効性を主張した。

第3章では、まず、西郷が論じた「絵本モンタージュ」と、絵本作家や絵本研究家による「絵本モンタージュ理論」を考察した。彼らは絵本モンタージュを、「画面間モンタージュ」と「画面内モンタージュ」に分けて整理し、「画面内モンタージュ」には、一つの画面内に複数の時間軸が同時に描かれる「異時同図」と、一つの画面内に複数の空間が描かれる「異空間同図」があると述べている。また、「同時的表現」と「非同時的表現」についても解説している。さらに、国語科教育学における絵本の「表象のしかけ」研究者である余郷の「絵本のモンタージュ効果」を分析考察し、本論文における「絵本のモンタージュ効果」を定義づけた。

第4章では、小学校国語教科書における絵本原典教材レイアウトの問題点を指摘した。絵本には、見開きやページをめくることによって展開していくという絵本固有の表現構造がある。ところが教科書

レイアウトは、絵本固有の表現構造を破壊し、メディア構造を「絵と文の複合テキスト」から「文字テキスト」へ転化させてしまっているという教科書編集の問題点を、具体例を挙げながら論じた。

第5章では、絵本のモンタージュ効果が絵本作品の「読み」に及ぼす影響を考察した。絵本を原典とした小学校国語科教科書教材「ニャーゴ」を題材に、特定場面の登場人物の心情理解における教科書のさし絵の影響・効果を調査した。絵本『にゃーご』と教科書教材「ニャーゴ」のレイアウトを比較し、絵本のモンタージュ効果が特定場面の心情把握に影響を及ぼした可能性について考察した。

この研究により、絵本とは絵と文の混合テキストで成り立つマルチメディア作品であり、その「読み」には絵のコードと文のコードの両方を適切に読解する必要があることが示唆された。とくに、絵本のモンタージュ効果は、人間の前意識に働きかける無自覚の知覚情報であるため、意識して「読解」をせねば、情報を受けとったことに気づくことができないものである。文章の読解力育成には学習が必要であるように、さし絵などの非言語テキストや文と絵の混合テキストの読解にも学習が必要なのだ。少なくとも、絵本を教材として使用する指導者は、教材研究として、モンタージュ効果など「絵本の表象のしかけ」に気づき、自覚的に絵本の視覚情報を受けとる必要がある。

そこで、第6章では、絵本のモンタージュ効果を含む「表象のしかけ」を学習材とした教員養成課程の授業実践とその効果を検証した。絵本のモンタージュ効果など、絵本に施された表象のしかけから無自覚に受けとっている情報も、学習によって自覚的に受けとることが可能になることを実証し、絵本という複合メディアテキストを原典とした教材を取り扱うなら、文章の読解だけでなく、絵の読解もするべきであることを提案した。

第7章では、絵本モンタージュ理論が動画の映像メディア・リテラシー獲得にどのように援用できるかを論じた。具体例として、映画『かぐや姫の物語』を取り上げ、映像表現のしかけを絵本モンタージュ理論の応用によって分析した。

第8章では、これまでの理論が古典入門期指導に応用できることを提案した。古典作品は、言語抵抗の壁があるのみならず、生活様式も価値観も現代とは大きな相違点があるという二重のハードルが学習者の作品理解を阻んでいる。この章では、古典世界のイメージ化と学習者の興味・関心を喚起させる取り組みの事例を紹介し、古典入門期指導における前意識知覚活用授業の理論について論じた。具体例として、映画『かぐや姫の物語』視聴を通して古典常識を学ぶ学習活動を提案した。

### 3. 研究の成果

本論文の目的は、国語科教育において、言語テキストだけではなく非言語テキストを取り扱う必要性と正当性を述べることにあった。コロナ禍で当初予定していた実証実験が出来なくなったことで、本論文では実証が不十分であったことは否めない。だが、絵本のモンタージュ理論の成立過程を明らかにしたこと、それを人間の知覚と結びつけて考察したことには意義があったと考えている。さらに、西郷の『絵本論』の考察を通して、絵本を「読む力」が、文学作品を「読む力」育成の基礎演習となることを明らかにできたことも、国語科教育にとって有益な研究成果であったと言えるだろう。絵本原典の作品が教科書教材となる際のレイアウトの変更が子どもたちの「読み」に影響を及ぼしている可能性にも言及した。本研究が、次期教科書改訂に些少でも参考になれば幸甚である。